

CELの歩み④ 再興期「2019」

激動の時代に描く、再興の道筋 — 研究するCELから行動するCELへ —

Tanaka Masato 田中雅人 × Kanazawa Shigeko 金澤成子 × Tomio Hiroyuki 富尾博之
[第10代所長] [第11代所長] [現所長]

Facilitator
Yamanoh Hiroshi 山納洋
[所長代理]



前列左から、富尾所長、金澤氏、田中氏。後列、山納所長代理。

加藤しのぶ構成
宮村政徳撮影

めて『CEL』誌の既刊137号分を読み返しながら、歴代の所長が何を考え、舵取りをしてきたかを私なりに捉え直してみました。

その中で今回4つに区切った期を大きく振り返ると、CELが設立された1986年4月から2000年3月の「草創期」は、『CEL』誌の創刊時に「絶えず社会に対して一歩先からの視点を提供できることを目指す」とあるように、初代所長の倉光弘己さんをはじめとする広い見識と強い発信力を誇った所長が牽引した時代だったと感じています。続く2000年4月から2016年3月の「中興期」は、CELが企業内研究所として大阪ガスという会社に対してどれだけ貢献ができるかといった「内側へ向けた視点」も問われるようになり、CELの方向性をどう定めていくかを模索した時代であるように思っています。さらに2016年4月から2019年3月までの「再起動期」は、池永寛明さんが研究を「再編集」し社会と企業につき直す「ルネッセ」を掲げてCELの再起動に力を注いだ時代です。そして続く2019年4月以降から現在までを「再興期」と位置付けているわけですが、「再興」というキーワードを挙げた理由の一つは、コロナ禍という時代の大きな転換期を経て現在に至っているということがあります。

ここでは田中さん、金澤さんにとってCELの「再興期」がどのようなもので、何を目指していたのかを振り返り、さらに富尾さんと現在

のCEL研究員は今後、将来を見ずして何を発信していくのかを考えていければと思います。

「再興期」のCEL — コロナ、組織再編のなかで

山納 まず2019年から所長を務められた田中さんに着任前のCELの印象、所長着任時の思い、在任中の方向性と取り組みなどについてお聞きしたいと思います。

田中 私にとってCELとの出会いは、新入社員だった(92年)当時に読んだ『ジオカタストロフィ』という本から始まります。CELでの研究内容をNHK出版が再構成して発行したものです。現在の状況が続くと人類は100年以内に滅亡する可能性があるという内容に衝撃を受け、今でも自分が行動する時の指針ともなっています。この経験から、CELは世の中でもあまり目を向けられていなかった問題にいち早く取り組んでいる大阪ガスの看板的存在であり、社外の評判がとても高い発信力のある研究所という印象をもっていました。その所長というと先ほど山納さんも話された倉光さんのような、社内でも文化人といわれるような方が担うものだと思っていましたから、文化的素養のあまりない私が所長と聞いた時、いったい自分は何を求められているのかと悩みましたね。当時私は近畿圏部長と兼任という形で着任しましたので、これはおそらく私自身がコン

2019年末からはじまった新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、社会に大きな変化をもたらした。その最中の2020年3月、エネルギー・文化研究所(CEL)は単独組織ではなくなり、近畿圏部[*1]に統合された。その後、DaiGasグループ機構再編により、2022年4月からは大阪ガスネットワーク株式会社事業基盤部内で地域共創活動を推進する組織の一つとなっている。コロナ禍で社会生活が激変し、組織も大きく転換する中でどのように舵を取ったのか。所長を務めた田中雅人、金澤成子、そして現所長・富尾博之の3名に話を聞いた。

山納 今号ではエネルギー・文化研究所(CEL)の40年を4つに区切りその歩みを振り返っていますが、ここではCELの「現在」について2019年以降に所長を務められた田中雅人さん、金澤成子さん、そして現所長の富尾博之さんにお話をお聞きしたいと思います。

その前に自己紹介をしますと、私は2023年4月にCELに異動し、現在、所長代理を務めています。CELとは近畿圏部時代も含めて十数年の関わりになりますが、今回あらた

ピタンスをもって研究をするということではなく、むしろ組織マネジメントをせよということだと考えました。まずは、研究員の方々がより研究を深め、それを内外に発信していくことに對してしっかりと後方支援しようと考えました。山納 そのためにどのような方針を立てられましたか。

田中 実は2019年以降、CELは会社の機構再編に翻弄されたところがありました。それまでの独立した組織から近畿圏部の一組織となり、後に大阪ガスネットワークに分社するのですが、そのなかで組織としての形を変えざるを得なくなったところがあります。そこにコロナ禍でした。とはいえ、そのような環境の変化の中で萎縮してしまわないよう、むしろそれを好機ととらえて次に社会がどう変わるか、何をすべきか考えようと話し合いました。

山納 コロナの先を見据えて社内で行った「ア



2019年9月、シンガポールにて「語りベシアター」初の海外公演。栗本智代研究員は、日本や関西の文化に関心を持つシンガポール人に、英語と大阪弁で「語りベシアター」形式を交えながら文楽の魅力や作品を紹介。





フターコロナ創造プロジェクト」もその時期でしたね。

田中 研究員の方々が考えたテーマ、やりたい取り組みには絶対に「ノー」はいわないという方針で進めました。むしろ、やりたいと思うことは何でもやりなさいと後押しするのが自分の役目だと思っていました。

山納 特に印象に残った取り組みはありますか。
田中 栗本智代研究員の「語りベシアター」が2019年9月にシンガポールで初の海外公演を行ったことですね。JCC（在シンガポール日本国大使館ジャパン・クリエイティブ・センタ）の設立10周年で招かれ、現地で初めて上演される文楽をわかりやすく解説し、その代表作の一つ「曽根崎心中」を紹介したものです。海外での公演そのものに反対もありましたが、公演は満席で質疑応答も活発でした。「語りベシアター」が海外でも評価を得られた成果は大きいと思います。

山納 金澤さんはCELの所長に就任された

富尾 私は長く家庭用エネルギー部門の直営業をやってきました。CELは縁遠い存在でした。ところが2022年4月から大阪ガスネットワークで地域共創活動を管轄するようになってからCELのこれまでの取り組みを知る機会が増え、皆さんがおっしゃるように社外評価がとても高いことに改めて気づいたんですね。ただ、社内評価はそれほどではない。そこで2024年4月に所長に就任するにあたり、CELの社内評価をもっと高めたいと考えました。CELが何をしているのかをきちんと知ってもらえる環境を整備するのが与えられたミッションの一つだと思っています。

私の着任はコロナ後で、リアルでの活動が再開できるようになっていましたから、CELの強みでもあるフィールドワーク的な研究をもっと推進したいと考えました。さらに、外部の団体とのコラボレーションを進めることで、認知度や活動の価値を高めていくという方向も意識しました。先ほど話題が上がった「語り



時、どのように考えられましたか。

金澤 私はCEL設立の3年後に入社していますので、もちろん存在は知っていましたが、深い関わりはなかったんですね。ただ企業内研究所でありながら、エネルギーに寄ることなく公平な立場で、社外と交流している研究所という印象がありましたし、その公平性が故に長く存続しているのだろうと思っていました。

私が着任したのは2020年、コロナ禍の真ただ中で在宅での業務を余儀なくされた時期でしたから、長い歴史をもつCELの在り方も方向転換が求められるタイミングだったかと思えます。その責任の重さを感じつつ、田中さんと同じように、研究員の皆さんの取り組みを理解し、どこまでサポートできるかを考えました。また私はこれまで「行動観察」「*」といった取り組みや新規事業などにも多々関わっていましたが、チャレンジングな面も期待されているとも感じていました。

CELの一番の強みであるフィールドワークにも制限がかかる中で、現場の生きた声を聞くのは難しい時期でしたが、世の中に対してコロナ禍が与えた影響をきちんと捉えるいい機会でもあると考え、テーマとして取り上げていきました。その取り組みの一つにワーキングマザー22人を取材し、コロナの中で女性の考え方がどう揺れ動いているかといった調査があります。コロナを通して価値観が変わるもの、変わらないものを浮き彫りにすることができたので

ベシアター」では、2023年、2024年の生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪「*」でガスピルの設計もした建築家・安井武雄を題材にした公演を行い、盛会でした。このような自治体や地域の事業と連携した活動はこれからもますます広げていきたいと思っています。

山納 他に今進めている取り組みはありますか。
富尾 CELは2015年に、都市居住魅力の発信、活力ある地域社会の創造に貢献することを目的に、長年協力関係にあった大阪くらしの今昔館と包括連携協定を締結し、様々な取り組みを行ってきました。そして、昨年から新たに小西久美子研究員が「お出かけ今昔館」を開催しています。大阪くらしの今昔館から館蔵資料（レプリカ）を、大阪ガス実験集合住宅NEXT21に「お出かけ」させて、専門家の解説で鑑賞した後、実際にまちを探求し参加者同士で交流するというもので、新たな「住むまち・大阪」の魅力創出につながることを期待しています。

CELの強みと課題

山納 先ほどからCELの「強み」という言葉が聞かれますが、皆さんはCELの強みをどう考えますか。また逆に課題と思われることはありませんか。

田中 かつてCELは大阪・梅田駅近くの阪急グラนด์ビルにありました。新大阪にもアクセ



はないかと思っています。

また「中興期」以降、社外からの評価は高くとも、社内では存在が埋もれていく傾向にあったCELの存在意義を社内に向けて発信することにも力を入れようと考えました。Daigasグループの目指す方向として掲げられた「地域の価値創造」をCELのビジョンとして再定義し、社内にも我々のやっていることがDaigasグループの目指すものと合致していることをアピールしました。

山納 他に印象に残った取り組みはありますか。
金澤 「活力ある高齢社会づくり」を研究していた遠座俊明研究員（当時）の「健康・生きがい就労トライアル」は、元気な高齢者が人材不足に悩む福祉事業所や保育所等で短時間・短期間の就労に取り組み、生きがいや地域での活躍の場を得る仕組みですが、研究が社会実装に結び付いた好例だと思います。

山納 現所長である富尾さんにも同じことを伺いたいと思います。

スがいいという地の利のよさもあって社外の学者、財界人など様々な方々が移動の合間にふらりとやって来られていて、時にはそこで即席座談会が開かれるなど、まるでアカデミアの磁場のような場所でした。そうした環境の中で研究員も交流を広め専門分野の研究をより深めていったと思うんです。企業内研究所でありながらこうした豊かな交流ができていたのがCELの強みだと思います。CELを出て大学の教授になった人は何人もおられますが、それはCELにあった豊かな交流環境が育んだものだと思います。そして、こうした「CELファミリー」が研究所を支えてくれているのが、CELの強みと言えらると思います。

ただ、組織再編を経た今、研究分野に偏りを感じています。「エネルギーと都市と文化」を核に、経済や教育、食など多岐にわたる研究がなされていたのですが、人数の減少もあって今は研究領域が狭まっている。何より、数年前からエネルギー分野を研究する人が前田章雄研究



